

夏目漱石の名著『夢十夜』と同じ「こんな夢をみた」という冒頭から始まる黒澤明監督の『夢』(1990年)という映画は、「日照り雨」「桃畑」「雪あらし」「トンネル」

私見創見 Thursday

「鴉」「赤富士」「鬼哭(きこく)」「水車のある村」の8話オムニバス形式で構成される。八つの物語は、自分の見た夢を元に映画化したもの

で、物語一つ一つに込められた人生や社会へのメッセージを感じる事ができる。人間が築き上げた文明への警告や皮肉が分かりやすく描かれ、人間は自然や環境に対してもつと謙虚であるべきだと訴えている。黒澤明は、核(核兵器と原子力発電の両方)にも強く反対していた。80年代の後半に原発を真正面から批判する映画を撮った気概と先見の明には感服せざるを得ない。美しい映像美に心が震えた『桃畑』は特に印象的で、今でも鮮明に記憶している。黒澤はこんな夢をみた。ひな祭りの日、少年時代の自分が屋敷の中で不思議な少女(桃の精)を見つける。逃げた少女を追って裏にある桃の段々畑跡にたどりつく。等身大のひな人形の一回が出現する。彼らは桃の木の霊で、

幸せ願う気持ちには世界共通

桃の木を切ってしまったことを責め立てる。しかし、桃畑を切られることが悲しかったことを涙ながらに訴えると、態度を和らげ、大勢のひな人形による壮麗な舞を披露してくれる。(山梨県石和市の段々畑をひな壇に見立ててロケ撮影したものを強く印象に残っているシーンの一つ) 後には、わずかな花を咲かせていた小さな桃の木が一本だけ残されていたといった内容だ。そこには、環境破壊への強い怒りと抗議が込めら

社会問題とアーティスト

佐貫 巧

八戸学院大 短期大学部 准教授



さぬき・たくみ 1982年、静岡市生まれ。多摩美大卒、東京芸大大学院修了。2013年から現職。14年より八戸圏域で現代芸術教室「アーティスト」を主宰し、アートを通して少しでも生きやすい世の中をつくる活動をしている。おいらせ町在住。

れている。私は、ひな人形の産地である静岡市に生まれたため、幼いころからとても身近なものだった。ひな祭りの由来は、平安時代、遣唐使により中国から伝えられた上巳節が起源となっていたらしい。中国では、季節の節目には邪気が入って災いをもたらすと考えられていた。春の季節の節目、つまり3月上旬ごろの上巳に邪気をはらう行事として上巳節があった。上巳節は、春が訪れたことを祝い、女の子だけではなく老若男女を問わず全ての人々の無病息災を願う行事だったようだ。ひな人形の由来は、日本では元々、形代と言われる身代わり信仰があった。邪気をはらう方法として、自身に付いている邪気を紙や草木で作った人形にならして移し、それを川に流すことで邪気がはらわれるというわけだ。芸術性の高い民芸品として有名なマトリョーシカは、ロシア旅行のお土産やプレゼントとして、われわれ日本人にもなじみのあるものだ。女の子の名前で「マトリョーナ」が多かったため、愛称としてマトリョーシカと呼び、人形の中からまた人形が出てくることから家内安全、子孫繁栄の意味が込められている。諸説あるが、19世紀末、神奈川県箱根町にあったロシア正教会の避暑館にやってきたロシア人修道士が、本国への土産に持ち帰った箱根細工の七福神の入れ子人形が元で、日本がルーツとも言われている。ひな人形やマトリョーシカのように、伝統的なものや芸術分野でも世界はつながっている。子どもが健やかに育ち、幸せになつてほしいと願う気持ちは世界共通であることを忘れてはならない。アーティストは、人より敏感に世の中に吹いている風を感じ取ることで成り立っている。社会で起こっている事象に対して反応し、問題提起をすることで気づきとなり、連鎖していくきっかけとなる。そして、責任追及するだけでなく自分の内面に責任や原因の一端があるのではないかと問いかけにもなる。終わりの見えないつらさや悲しみを抱きながら、今日、明日を一生懸命に生き、誰かのために生きている人たちがいる。身近な人を大切に、愛することによって優しい世界が来ることを願ってやまない。